「黒い汚辱」キャンペーン
——「ナチズムと人種主義」考（2）

原　田　一　美

Die “Schwarze Schmach”
—Versuch über “Nationalsozialismus und Rassismus”（2）

HARADA Kazumi

Resümee

Die Verwendung farbiger und schwarzer Truppen aus den französischen Kolonien im Rheinland während der Besatzungszeit erregte nicht nur in der deutschen Öffentlichkeit die Gemüter. Auf dem Höhepunkt der Kampagne in den frühen zwanziger Jahren brachte das Thema auch hunderte von Artikeln in der internationalen Presse hervor.

Unter dem Gesichtspunkt der “Entwicklung des Rassismus in Deutschland” behandelt die vorliegende Arbeit die Kampagne gegen die Verwendung der Kolonialtruppen in Deutschland, die man die “Schwarze Schmach” nannte. Dadurch möchte ich zeigen, dass die “Schwarze Schmach”-Kampagne sozusagen die “racialisation of the postwar situation”（T.M.Campt）veranlasste und den Weg zum Nationalsozialismus bahnte.

Schlüsselwörter : Nationalsozialismus, Rassismus
ナチズム，人種主義

はじめに

ドイツのラインラントは，第一次世界大戦終結後，連合国の占領下におかれることになったが，最大規模のフランス軍には，モロッコ，アルジェリア，セネガルなどアフリカ植民地出身の兵士が含まれていた。フランスによるこのような植民地兵の使用に対して，ド

平成19年２月27日　原稿受理
大阪産業大学　人間環境学部

イツでは激しい反対のキャンペーンが繰り広げられた。新聞などのメディアでは，植民地兵によるレイプ事件などが頻繁に取り上げられ，多数のパンフレットが出版され，抗議集会が開催され，共和国や州の議会でも議論の対象となった。

当時ミュンヘンで政治活動を開始していたヒトラーも，このキャンペーンには注目していたのであろう。すでにキャンペーンが下火になっていた1924年，獄中で口述筆記させた『わが闘争』の中で，「ヨーロッパの心臓部であるライン地方のネグロ（ママ）の血によるペスト化」に言及し，ドイツに対する復讐心にとりつかれたフランスと「ヨーロッパ大陸の中央部の雑種化を始め，低劣な人種からの伝染によって白色人種のもつ独裁的存在の基礎を奪おうとするユダヤ人」を激しく非難している[1)]。

本稿では，このキャンペーンに焦点を当てて，「ドイツにおける人種主義」の問題について考えてみたい。第一次世界大戦までの時期に限定してこの問題を考察した拙稿では，少なくともそれまでは，ドイツの人種主義が他の国ぐにと比べてとくに強烈だったわけではないことを示した[2)]。それでは，このような状況はワイマル期に大きく変化することになったのだろうか。「ラインラント・キャンペーン」の経緯や内容を検討することによって，「ドイツにおける人種主義」，あるいは「ナチズムと人種主義」という問題について考察するうえでの一助としたい。

「ラインラント・キャンペーン」は，すでに多くの研究によって取り上げられている。だが，1970年に出されたネルソンの研究は，「外交政策における武器としての人種」という観点からの研究であり，この問題をドイツにおける人種主義の拡がりという観点からは捉えていない[3)]。ポメリンの『ラインラントの雑種の断種』（1979年）は，その表題からも明らかなように，占領期に植民地兵とドイツ人女性のあいだに生まれた子どもたちの第三帝国下での運命に主眼点がある[4)]。マークスは，偏見に基づくプロパガンダとしての側面を強調し，「これは，現代世界におけるプロパガンダの役割と，プロパガンダが利用することができる人間の弱点の存在を示している」と結論づけている[5)]。このキャンペーン

1）アドルフ・ヒトラー（平野一郎・将積茂訳）『わが闘争（下）Ⅱ　国家社会主義運動』（角川文庫，1995年），350～51頁。

2）拙稿「『ナチズムと人種主義』考（1）――20世紀初頭までの系譜」『大阪産業大学論集　人間環境論集』5（2006年3月）。

3）Keith L. Nelson, The "Black Horror on the Rhine" : Race as a Factor in Post-World War I Diplomacy, in: *Journal of Modern History* 42 (1970), pp. 606-627.

4）Reiner Pommerin, "*Sterilisierung der Rheinlandbastarde*". *Das Schicksal einer farbigen deutschen Minderheit 1918-1937*, Düsseldorf 1979.

5）Sally Marks, Black Watch on the Rhine: A Study in Propaganda, Prejudice and Prudence, in: *European Studies Review* Vol. 13 (1983), pp. 297-334. 引用箇所は，322頁。

をナチスの人種主義と明確に関連づけているのは，レープツェルターの研究である。彼女によれば，このときの「ヒステリックな人種主義的プロパガンダ」は，「攻撃的なナチスの人種煽動を先取りしていた」[6]。

長い間，「ドイツにおける人種主義」といえば，もっぱら反ユダヤ主義（最近では「反セム主義」と言われることも多い）に焦点が当てられてきた。だが，近年では，カルチュラル・スタディーズの観点からドイツにおける黒人，あるいはアフリカ系ドイツ人の問題も取り上げられるようになってきた。そのような観点から行われたルセインの研究およびキャムプトの研究[7]も，このキャンペーンに言及している。ルセインによれば，このキャンペーンは，「ドイツの黒人の運命における質的変化をもたらした」が，これによって，一般的な反黒人性が拡がったと論じることは困難であるという。キャムプトは，このキャンペーンがアフリカ系ドイツ人を「危険な亡霊」として構築するうえで重要な役割を果たし，後のナチスの行動やイデオロギーに肥沃な土壌を提供したと主張している。

コラーの研究[8]は，このキャンペーンだけではなく，第一次世界大戦前から行われていた，イギリスやフランスによる植民地兵の採用をめぐる議論を取り上げ，植民地主義および軍事政策と人種主義との関連を明らかにしようとする意欲的なものである。出版されたばかりのヴィガーの研究[9]は，まさにこのキャンペーンを分析の対象として，人種主義的差別におけるジェンダー・階級・ネイション・人種の解きほぐしがたい密接な関連を明らかにしようとしている。

6）Gisela Lebzelter, Die "Schwarze Schmach". Vorurteile — Propaganda — Mythos, in: *Geschichte und Gesellschaft* 11（1985), S.37-58. 引用箇所は，37頁。

7）Clarence Lusane, *Hitler's Black Victims. The Historical Experiences of Afro-Germans, European Blacks, Africans, and African Americans in the Nazi Era,* New York/London 2002; Tina M. Campt, *Other Germans. Black Germans and the Politics of Race, Gender, and Memory in the Third Reich,* The University of Michigan Press 2004; Tina M. Campt, Converging Specters of an other within — Race and Gender in pre-1945 Afro-German History, in: Patricia Mazon/Rheinhild Steingrover（eds.), *Not so Plain as Black and White. Afro-German Culture and History, 1890-2000,* University of Rochester Press 2005, pp.82-106.

8）Christian Koller, *'Von Wilden aller Rassen niedergemetzelt'. Die Diskussion um die Verwendung von Kolonialtruppen in Europa zwischen Rassismus, Kolonial- und Militarpolitik*（*1914-1930*), Stuttgart 2001.

9）Iris Wigger, *Die "Schwarze Schmach am Rhein". Rassistische Diskriminierung zwischen Geschlecht, Klasse, Nation und Rasse,* Munster 2007. 本稿の関心は，一部このヴィガーの研究と重なっているが，本稿の大半を書き上げた時点で入手したために，その成果を十分に組み入れることができなかった。

研究史の簡単な説明からも推察できるように，このキャンペーンは多様な観点から読み解くことが可能である。これを手がかりとして，敗戦後のドイツの外交戦略の問題，ヨーロッパ各国の植民地政策の問題，政治とプロパガンダの関係，あるいはプロパガンダにおける人種主義の問題などについて考察することができる。またヴィガーは，このキャンペーンには，短期間のうちに敗戦，革命，帝政の崩壊を経験し，しかも階級間の架橋しがたい分裂に苦しんでいたドイツを，階級を超えてネイションとしてまとめ上げる意図があったことを明らかにしている[10)]。

それに対して，このキャンペーンに注目してドイツにおける人種主義の拡がりについて検討しようとする本稿の目的は非常に限定的なものである。それでは，まずキャンペーンの経緯を簡単に紹介し（第Ⅰ章），次いでキャンペーンの内容を分析し（第Ⅱ章），最後にこれを「ドイツにおける人種主義」という問題の中に位置づけてみたい[11)]。

Ⅰ

1920年４月10日，イギリスの『デイリー・ヘラルド』紙にイギリス人ジャーナリスト，エドマンド・D・モレルの記事が掲載された。見出しには，「ヨーロッパにおける有色人種による災厄。フランス，ライン河畔で性的恐怖を引き起こす。ドイツ人少女たち，行方不明」という言葉が躍っていた[12)]。数日前の４月６日，ヴェルサイユ条約の規定によってラインラントを占領していたフランス軍は，ダルムシュタット，フランクフルトなどにも進駐した。その際，フランクフルトでは，住民と軍（モロッコ人部隊）のあいだで生じた小競り合いの中で，軍側が発砲して５人の死者が出ていた[13)]。すでに３月27日に「ヨーロッパにおける黒人部隊の使用」という文章を『ネイション』紙に投稿していたモレル[14)]は，冒頭に挙げた記事において，ラインラントを占領したフランス軍の中に多くの有色人種が

10）とくに以下を参照。*Ibid.*, S.179-195.

11）本稿で取り上げるのは，キャンペーンの中で示された植民地兵士像，黒人像である。彼らの実際の態度や行動，および彼らとラインラント住民との関係はまた別の問題であることをお断りしておきたい。

12）Pommerin, *op.cit.*, S.12.

13）Marks, op.cit., p.310. マークスによれば，フランクフルト住民の怒りは，まもなくモロッコ人部隊が撤退させられたことによって収まったという。ところで，フランスによるこの占領地域の拡大は，その少し前にドイツ軍が非軍事地域であるルール地方に軍を進めたことに対する対応であった。以下を参照。Pommerin, *op.cit.*, S.12.

14）Nelson, op.cit., p.615, fn. 41. なお，モレル自身によれば，彼は３月になってこの事実を知ったという。E. D. Morel, *Der Schrecken am Rhein,* Berlin 1922, S.5.

含まれていることを激しく非難したのである。そして，この新聞記事を合図にしたかのように，ドイツでも，また諸外国でも，猛烈な反フランス・反植民地兵キャンペーンが巻き起こった。

フランスは，すでに戦前からアフリカなどの植民地住民による軍の増強に取り組んでいた。第一次世界大戦中には，50万人以上の兵士を植民地から召集したという。また，「有色人種兵士」ということであれば，イギリスは，さらに多くの兵士をインドなどの植民地から徴集していた[15)]。

すでに大戦中から，ドイツ植民地省は，フランスによる植民地軍の使用がヨーロッパ文明を危険に陥れていると激しく非難しており，この問題は，ドイツの新聞でも取り上げられていた[16)]。休戦交渉の際，外相ヴィルヘルム・ゾルフは，ドイツの領土が，有色人種フランス兵もしくはアメリカ兵によって占領されるのを阻止するようにと，ドイツ代表団に要請していた。また，同様の指令は，ヴェルサイユ条約に関する交渉の際にも出されている[17)]。イギリスやアメリカ側も，植民地兵を占領軍に加えないようにとフランスを説得しようとしたようであるが，フランスは頑なに態度を変えず，多くの植民地兵をラインラントに送り込んだのである[18)]。

占領軍の中にどのくらいの植民地兵がいたのかを確定するのは困難である。ネルソンによれば，フランス占領軍全体の兵力は，1919年冬のおよそ20万人から，ヴェルサイユ条約が発効する1920年１月には，約８万5000人に減少したが，そのうち植民地兵は，20年春に４万2000人，21年春には４万5000人くらいであった。このうちの大半は，アルジェリア人，モロッコ人，チュニジア人の北アフリカ植民地出身者によって占められ，およそ１万人がマダガスカルとセネガルの出身者であった[19)]。マークスは異なる数字を挙げている。アメリカ軍の将校による1920年の調査によれば，1919年１月から20年６月までの黒人兵の平均は5200人，その他の非白人兵士は２万人であるが，フランス側の資料では，1919年５月から20年３月までの平均は約３万5000人，20年６月まではおよそ２万5000人，その後は２万

15）これらの国における植民地兵の使用，およびこの問題をめぐるイギリス，フランス，ドイツにおける議論については，以下を参照。Koller, *op.cit.*, S.43-198. なお，ドイツによる植民地兵部隊の結成は，ドイツの植民地がイギリス，フランスと比べて非常に小さいことなどのために，真剣には考慮されなかった。*Ibid.*, S.77f.

16）Nelson, op.cit., p.608.

17）Ibid., pp.608-609.

18）フランスがなぜ植民地兵士を占領地に送り込んだのかという問題については，以下を参照。Ibid., pp.611-613.

19）Ibid., pp.610-611.

人になるという[20]。いずれにせよ，最も多いときでは2万人以上の「有色人種兵士」がドイツに駐留していたが，そのうち「黒人兵」は少数であった。

さて，モレルの記事が掲載されてから，占領軍における植民地兵士の問題は，ドイツの国会や州議会でも取り上げられた。4月23日，6人の国会議員が，ラインラントで黒人によって行われた暴行や殺害に言及して，以下のような質問を行っている[21]。

> プファルツとラインラントのわが青少年たちが汚され，わが民族が汚染され，ドイツ人および白色人種の尊厳が踏みにじられている。イギリスのジャーナリスト［モレルのこと—筆者］は，これを「考え抜かれた政策」と呼んでいる。ラインラントにおけるわが民族にとって破滅的で，ドイツ民族と白色人種の名誉と尊厳を貶め，一人のイギリス人が考え抜かれたものと呼ぶ，われわれの敵のこのような政策を政府は承知しているのか。

数日後には，独立社会民主党を除くすべての党派が，この問題について政府に対する質問を行った[22]。

> フランス人とベルギー人は，講和締結後も，ラインラントの占領地域で有色人種部隊を使用している。ドイツ人はこのような有色人種の悪用を汚辱だと感じ，彼らがドイツの文化的諸州で主権を行使することに憤っている。ドイツの女性や子ども，男性や男子にとって，これらの未開人は身の毛もよだつほどの危険である。彼らの名誉，肉体と生命，純粋さと純真さが汚されている。有色人種部隊がドイツ人女性や子どもを辱め，抵抗する者を傷つけ，いやそれどころか殺しさえする事件が増えている。実際に起こったおぞましい事件のほんのわずかしか報告されていない。羞恥心や卑劣な報復への恐れから，不幸な犠牲者やその家族は口を閉ざしているのである。フランス当局とベルギー当局の命令で，占領地域には，売春宿が設けられ，有色人種兵士が列をなして殺到し，ドイツ人女性たちが彼らに身を委ねている！このような状況は，恥ずべき屈辱的なもので，耐え難いものである。世界中で，この拭いがたい汚辱を非難

20）Marks, op.cit., p.299. モレルは1920年8月に出版されたパンフレットの中で，フランス軍におけるアフリカ人兵士の数を3～4万人としている。Morel, *op.cit.*, S.5. また，20年の4～5月に行われたドイツの国会や州議会での討議では，5万人という数字が挙げられている。Pommerin, *op.cit.*, S.13, 17.

21）*Ibid.*, S.12f.

22）*Ibid.*, S.16.

する，憤慨した声が挙げられている。人間性を汚すようなこうした事態について，政府は承知しているのか。どう対処するつもりなのか。

以上のような質問に対して，政府側の答弁を行った外相ケスターは，政府はこれまで，あらゆる機会を捉えて，黒人兵を撤退させるよう働きかけてきたが，フランスに対する公式の抗議よりも，ヨーロッパや全世界の世論に訴える方が有効であろう，と答えた。ただ，彼は，有色人種部隊の使用に反対する闘争は，けっして黒人自体に対する闘争ではないことを強調している[23)]。

バイエルン州議会では，すべての政党の女性議員を代表した女性議員が，共和国政府に働きかけて有色人種兵士を撤退させるようにと州政府に要求した[24)]。

1920年から22年にかけて，ドイツの多くの新聞では，占領地域で植民地兵が犯したというレイプや傷害事件などに関する記事が大量に掲載された。また，多数のパンフレットも出版された。たとえば，はやくも20年８月には，モレルの『ライン河畔の恐怖』とライン女性連盟による『ラインとルールの有色フランス人』が刊行されている[25)]。これらのパンフレットはいずれも英語，フランス語，スペイン語など５カ国語で出版され，外務省の援助を得て，外国にも送られた[26)]。

熱心にキャンペーン活動を行う個人や団体もあった。たとえば，ドイツ在住のアメリカ人女性ジャーナリスト，レイ・ビヴァリッジは，『黒い災厄』と題する新聞を出し，抗議集会を開き，絵はがきも作成した。その絵はがきには，「有色人種による占領から」生まれたという混血の赤ん坊と，連合軍の「封鎖」によって成長を阻害されたとされる６歳の白人の子どもが写されているという[27)]。ビヴァリッジが1922年に出版した『黒い汚辱―白い恥』というパンフレットの表紙には，彼女が二人の子どもと写っている写真が印刷されている[28)]。写真の説明には，「ドイツ人白人女性と有色人種フランス人との間の９カ月の子ども［２歳くらいに見える―筆者］，ドイツ人の６歳の栄養失調になった子ども―非人

23）*Ibid.*, S.16f. なお，マークスによれば，ドイツ政府が植民地兵の撤退を要求したことを示す証拠は，フランスの文書にも他の連合国の文書にも見つからないという。彼女はこのことから，ドイツ政府はむしろプロパガンダのために植民地兵がドイツに駐留することを望んだのではないか，と推測している。以下を参照。Marks, op.cit., p.310.

24）Pommerin, *op.cit.*, S.13.

25）Morel, *op.cit.*; *Farbige Franzosen am Rhein. Ein Notschrei deutscher Frauen*, Berlin 1921³.

26）Pommerin, op.cit., S.18.

27）Marks, op.cit., pp.312f.

28）Ray Beveridge, *Die Schwarze Schmach. Die Weisse Schande*, Hamburg 1922.

間的な飢餓封鎖の犠牲者［2歳くらいにしか見えない―筆者］」とあるが，絵はがきにもこのような子どもが写されていたのであろう。

ミュンヘンの技師ディストラーは，「黒い汚辱に反対するドイツ緊急同盟」という団体を結成し，『ライン河畔の汚辱』という月刊誌を発行し，「黒い汚辱」というタイトルの映画も作っている[29]。また，ハンブルクの「ドイツ・フィヒテ同盟」も，その月刊誌をドイツ語，英語，スペイン語で発行し，諸外国に送った。さらに，ドイツ人女性を襲うゴリラを描いた絵はがき（「黒い汚辱」というタイトル）も作成している[30]。

このキャンペーンの中でおそらく最も頻繁に使われたのは，「黒い汚辱」というスローガンである。マークスによれば，「黒い汚辱」という同じタイトルを掲げたパンフレットが18種類も刊行された[31]。また，グイド・クロイツァーの『黒い汚辱―辱められたドイツの物語』という小説や，『黒い汚辱』という新聞連載小説も発表されている[32]。また，『クラデラダーチュ』や『ジンプリツィシムス』のような風刺漫画雑誌にも，これを題材にした多くのカリカチュアが掲載された[33]。このような「黒い汚辱」キャンペーンは，ドイツ以外の国ぐにでも大きな反響を呼んだが，この問題については，第Ⅲ章で取り上げたい。

ドイツ内外で激しく展開される反フランス・反植民地兵のキャンペーンに対して，フランス側も対抗プロパガンダを試みている。たとえば，ラインラントの聖職者や市長，旅館経営者などによる好意的な証言を集めたパンフレットなどが作成され，また，植民地兵士のあいだには梅毒や睡眠病が多いという告発はまったくのでっち上げだという医師の証言も刊行された[34]。だが，占領軍からの植民地兵士の完全な撤兵は最後まで行われなかった。たしかに，1920年6月には，セネガル人の2個連隊が引き上げたし，21年11月にはマダガスカル人部隊も続いた[35]。また，1925年秋のロカルノ条約締結以降は，占領軍の大幅な縮小も行われている。だがそれでも，1929年になってもなお，ラインラントには1000人の植民地兵が駐留していたのである[36]。

とはいえ，ドイツにおける「黒い汚辱」キャンペーンの展開は，駐留する植民地兵の実

29）Pommerin, *op.cit.*, S.18; Marks, op.cit., pp.314-316.
30）Marks, op.cit., p.313.
31）Ibid., p.313.
32）Lebzelter, op.cit., S.47. なお，クロイツァーの小説の内容については，以下を参照。Wigger, *op.cit.*, S.66-81.
33）これらのカリカチュアの一部は，以下に掲載されている。Wigger, *op.cit.*, S.82-104.
34）Nelson, op.cit., pp.619f.
35）Marks, op.cit., p.299.
36）Nelson, op.cit., p.625.

際の量的規模とはそれほど関係がなかったものと思われる。キャンペーンは，ロカルノ条約締結までに完全に沈静化していたからである。1920年に始まったキャンペーンは，22年まで続いたが，23年１月に，フランス軍・ベルギー軍によるルール地方の占領が始まると，急速に下火になったという[37]。ネルソンによれば，24年以降の相対的安定期には，「『ライン河畔の恐怖』はほとんど忘れ去られたかにみえた」[38] のである。

最後に，ヒステリックとも言えるほどの激しさをもって展開された「黒い汚辱」キャンペーンに対して，もちろん反対の声も挙げられていたことを指摘しておく必要があるだろう。上述したように，1920年４月には，国会で「ラインラントにおける有色人種部隊の使用」を非難する質問が行われた。このとき，唯一この共同質問に加わらなかったのが，独立社会民主党である。質問に続く討議の中で，独立社会民主党の女性議員ルイーゼ・ツィーツは，植民地兵だけが非難されている性犯罪を犯すわけではなく，そのような行為は軍事的占領一般の周知の結果であることを指摘し，人種闘争はきっぱりと拒否すると明言した。彼女が，中国ではドイツ人兵士のための売春宿が設けられたことに言及すると，国会議員のあいだからは激しい非難と抗議の声が挙げられたという[39]。

ラインラントにおける植民地兵の駐留を黒人に対するあからさまな人種煽動にしてはならないというツィーツの警告に対して，すでに触れたように，政府側の答弁に立った外相ケスターは，植民地兵使用への反対はけっして黒人自体に対する闘争ではないことを強調した。また，質問の趣旨説明を行った社会民主党の女性議員レールも，これは人種に対する闘争ではなく，ドイツに有色人種を送り込んだフランスに対する闘争だと念を押している[40]。しかし，キャンペーンの内容を見れば明らかなように，そこでは，黒人あるいは非白人に対する偏見や妄想が動員され，煽られ，さらに強化されていったのである。

37）Campt, *op.cit.*, p.63. もっとも，植民地兵に関する新聞記事の数に限定すれば，1923年１月から５月までは，22年よりもむしろ増加している。以下に掲載されたグラフを参照。Koller, op.cit., S.230.

38）Nelson, op.cit., p.625.

39）Pommerin, *op.cit.*, S.17; Lebzelter, op.cit., S.43f. この後，『クラデラダーチュ』は，アフリカの仮面のような黒い顔をしたツィーツのカリカチュアを掲載した。「ドイツにおいて，ツィーツ女史は肌の異なる人間に夢中になり，セネガル黒人の守護聖人となった」というキャプションがつけられていた。以下を参照。Wigger, *op.cit.*, S.132. カリカチュアは，96頁に掲載。

40）Pommerin, *op.cit.*, S.16.

Ⅱ

本章では，「黒い汚辱」キャンペーンの中で出版されたパンフレットが黒人をどのように描き出したのかを分析することによって，動員・構築された黒人のイメージを明らかにしたい。使用するパンフレットは，以下の6冊である。E･D･モレル『ライン河畔の恐怖』，ライン女性同盟『ラインとルールの有色人種フランス人―ドイツ人女性の救いを求める叫び声』，ハンス･アレクサンダー『ドイツにおける黒いペスト』，ハンス･ディストラー『ライン河畔のドイツの苦難―フランス軍国主義の恥ずべき支配に対する告発の書』，ヨーゼフ・ラング『黒い汚辱―フランスの恥』，レイ・ビヴァリッジ『黒い汚辱―白い恥』[41]。

もちろん，キャンペーン中に出版されたパンフレットはこの6冊に留まらない。「黒い汚辱」というタイトルのパンフレットや小説だけで18種類も出されたことはすでに触れた。少なくともこれまでの研究で言及されているパンフレットはまだ4冊あるが，残念ながら入手することができなかった。著者のモレル，ディストラー，ビヴァリッジについては，第Ⅰ章で触れた[42]。「ライン女性同盟」は，内務省の肝いりでラインラントの多数の女性団体を集めて結成された半官半民の組織である。アレクサンダーは，一般向けに『解剖学的性事典』などを出しているライターのようである[43]。ラングがどのような人物であるのかについては，残念ながら不明である。

ところで，内容分析に入る前に指摘しておかねばならないことがある。それは，すでに第Ⅰ章でも触れたように，「黒い汚辱」というスローガンが用いられているが，実際にはフランス占領軍における非白人系兵士の中では，黒人は少数だったということである。このような事実は，ドイツのメディアも十分に認識していた。たとえば，『ドイツ新聞』(1921年5月28日）には，次のような記事が掲載されている[44]。

・・・確かな情報によれば，これらの兵力構成［有色人種兵の連隊］は以下の通り

41) Morel, *op.cit.; Farbige Franzosen am Rhein. Ein Notschrei deutscher Frauen*, Berlin 1921[3]; Hans Alexander, *Die schwarze Pest in Deutschland!*, Leipzig 1921; Hans Distler, *Das deutsche Leid am Rhein*, Minden in Westfalen 1921; Joseph Lang, *Die schwarze Schmach. Frankreichs Schande*, Berlin 1921; Ray Beveridge, *op.cit.*

42) モレルとビヴァリッジの詳しい経歴については，以下を参照。Wigger, *op.cit.*, S.34-36, S.56-58.

43) 彼のパンフレット末尾の広告を参照。

44) Campt, *op.cit.*, pp.51f.

である。アルジェリア出身者から成る9～10連隊，チュニジア出身者の2連隊，モロッコ出身者の3連隊，マダガスカル出身者の1連隊。さらに，セネガル人（黒人）の小部隊と若干のインドシナ人が加わる。･･･したがって，厳密な意味での「黒人」は，まとまった部隊としてはもういないが，アルジェリア人，チュニジア人，モロッコ人といった北アフリカの褐色人は，黒人と強く混血しており，マダガスカル人はたいてい黒人に似たタイプである。しかし，問題なのは，肌の色の相違ではまったくなく，フランスが未開の有色人種部隊をわざと使用して，占領地域のドイツ民族に加えている侮辱である。

ドイツの抵抗はこれだけに向けられている。

たしかに，上記の6冊のパンフレットでも，「有色人種」(Farbige) と「黒人」(Schwarze, Neger) という表現が使用されているが，レイプや暴行などについての記述を見ると，両者がきちんと区別されずに用いられていることがわかる。「黒い汚辱」や「黒いペスト」といったタイトルやスローガンからもわかるように，アルジェリア人やモロッコ人による事件を取り上げるときにも，そこで喚起されているのは黒人のイメージであり，このようにして，すべてがまさに「白人　対　黒人」という二項対立に還元されている。

それでは，以下において，「黒い汚辱」キャンペーンの中で描き出された黒人のイメージを4つの要素に分けて見てみよう。もちろん，これらの要素が互いに密接に絡まり合っていることは言うまでもない。

① 動物（獣）的存在としての黒人＝黒人の「非・人間化」

6冊の中で，黒人＝獣的存在というイメージを最も強く喚起しているのは，アレクサンダーのパンフレットである。そこでは，「制服をまとった黒い野獣」，「黒い獣」，「獣のような黒人」，「黒い動物」といった表現が多用され，黒人が「非・人間」として表象されている。「非・人間化」ということで言えば，アレクサンダーはさらに，「人間に似た姿をしたこの化け物」，「黒い化け物」という表現も用いて，読者の恐怖心や嫌悪感を煽っている。

アレクサンダーほど極端ではないとしても，他のパンフレットも，黒人＝動物的存在（「非・人間」）というイメージを共有している。たとえば，「人間性を失った有色人種の群れの戦慄すべき振る舞い」（ラング，4頁），「この半動物」（ディストラー，13頁）といった具合である。また，ビヴァリッジは次のように述べている[45]。

45）Beveridge, *op.cit.*, S.20.

黒色人種は，白色人種と同じ文化的段階にはないことを忘れてはならない。黒人は白人よりもはるかに知力が低く，しかし，その代わり，性的感覚ははるかに強いことを忘れてはならない。黒人が酒を飲めば，野獣とかわらなくなり，何をしているかわからなくなることを，われわれは知っている。(圏点―筆者)

キャムプトによれば，黒人は，戦前のフランスにおける人類学において，「大きな子ども」として教育されるべき対象と見なされていたという[46]。それが，このキャンペーンでは，野蛮で獰猛な存在（＝野獣，あるいは「化け物」）へと「非・人間化」されているのである。

② 黒人のセクシュアリティ

上で引用したビヴァリッジの文章からもわかるように，すべてのパンフレットにおいて強調されているのは，黒人の強烈な（と想定された）性欲である。モレルによれば，一般的に言って，より原始的な人種の性欲は，ヨーロッパ諸民族の場合よりも本能的なものであり，したがってより激しく，抑制のきかない欲求である[47]。ライン女性同盟のパンフレットでも，「アフリカの未開人の獣のような欲望」，あるいは「動物的な本能」といった表現が見られる[48]。

「未開の黒人の激しい情欲」（ビヴァリッジ，13頁）を満たすために，占領地域では多数の売春宿が設けられたことも激しい非難の対象となっている。モレルは，占領地域の各自治体が，売春宿のためにどれほどの出費を強いられているかを示してみせる。また，売春宿の設置に異議を唱えた，ある町の町長の例も取り上げている。その町長は，売春宿を設けなければ，ドイツ人女性や少女，少年がどのような結果を被るかわからないと脅されたというのである[49]。

だが，ビヴァリッジによれば，若い黒人の「激しい情欲」は売春宿によっても満たされることはない。彼らは，「制御することを学んでいない情熱に圧倒されて，白人女性や，少女，少年，また老女にすら襲いかかる」[50]のである。すべてのパンフレットは，黒人（有色人種）が犯したとされるレイプ事件の具体例を多数取り上げている。なかでも，ライン女性同盟によるパンフレット（1921年の第３版）では，1918年11月26日から20年９月までの事件が，事件別に掲載されている。全部で，レイプ32件，レイプ未遂27件，殺人１件，暴力事件43件，少年に対する性犯罪７件である。しかも，「初版への序文」によれば，こ

46）Campt, *op.cit.*, p.35.
47）Morel, *op.cit.*, S.10.
48）*Farbige Franzosen am Rhein*, S.6.
49）Morel, *op.cit.*, S.11f.
50）Beveridge, *op.cit.*, S.21f.

れらは実際に起こった事件のほんの一部にすぎないという。そして，その序文では，非常に感情的で読者の怒りを煽るような告発が行われている[51]。

> 若い娘が，アフリカの未開人の獣のような快楽に奉仕するために通りから引きずっていかれる。娘や妻が家の中で，有色人種に襲われ汚される。野良仕事中の女性が動物的本能の犠牲となり，年老いた老女でさえ安心できない！

夫の見ている前で妻がレイプされるという事件など，ポルノグラフィまがいの話も取り上げられている[52]。ドイツ人女性を襲うゴリラを描いた絵はがきが作成されたことは，すでに触れたが，このキャンペーンが構築しようとしているのは，「獣の手にかかる白人女性の悲劇」という物語であった。このような物語は，好色なユダヤ人の手にかかる白人の乙女という反ユダヤ主義のプロパガンダと同じものであり，その煽情性によって人びとの関心を引き，同時に強い怒りを引き出すことできたのである。

③　病気のメタファー

「フランスは，この国に黒人ばかりか，病気をも持ち込んだ」（ディストラー，61頁）と非難されているように，黒人＝病気というイメージも多くのパンフレットにおいて強く喚起されている。なかでも，「黒人の強烈な性欲」と関連して，性病，とくに梅毒への恐怖心が煽られる。「ほとんどすべての黒い野獣は，最も恐ろしい性病にかかっている」（アレクサンダー，17頁），「最悪の病気によって汚染された有色人種の部隊」（ラング，３頁）といった具合である。

性病に対する恐怖心を最も強く煽っているのは，『ドイツにおける黒いペスト』である。そこでは，間接的な伝染の危険が強調され，「黒いペスト」が比喩としてではなく，文字通りの危険として描き出されている[53]。

> すべての性病の中で最も恐ろしい梅毒，黒人のフランス人がわが民族に持ち込んだ梅毒は，間接的にも伝染する。かならずしも直接的な性交渉が行われる必要はない。黒人が梅毒患者なら（そうでない黒人のフランス人がいるだろうか！），その手に触れただけで恐ろしい毒が注入されうる。・・・
>
> 黒人のフランス人が触った電話の受話器を使ったり，ドアのノブや，階段や橋の手

51）*Farbige Franzosen am Rhein*, S.6.
52）Distler, *op.cit.*, S.62.
53）Lang, *op.cit.*, S.19.

すり，市電の持ち手に触れたりしただけで，梅毒は蔓延しうる。黒人が使用したコップ，ハンカチ，食料品などによって拡がることは言うまでもない。

ディストラーも，占領によってドイツ人女性，とりわけ少女のあいだにいかに性病が蔓延するようになったかを強調する。「プファルツのある国民学校の女子生徒の検査では，33パーセントが性病との診断を受けた」，「リンデンブルクの病院では，1920年末の3ヶ月の間に，14歳以下の少女が300人以上，性病の治療を受けた！！［感嘆符は原文］」等等である[54]。

ヨーロッパでは，世紀転換期以降，各国に設立された性病撲滅協会などの活動によって，性病に対する関心が高まっていたが[55]，このような性病への懸念が，占領軍，とくに植民地兵に対する反感を煽るために利用されているのである。

④　世界の主人としての白人（「白人　対　黒人」の二項対立）

以上のような黒人のイメージは，白人のイメージと表裏一体である。すべてのパンフレットにおいて自明のこととして前提とされているのは，白人の優越性，白人による世界支配である。「白人男性は，有色人種にとって神のような存在，服従するのが当然の絶対的に優越した存在」（ラング，15頁）なのである。

したがって，白人に「服従するのが当然の」有色人種が白人の土地を占領し，白人を監視し，命令を下すのは，「文化全体への恥辱と危険」（ラング，5頁）であり，「ヨーロッパにおける有色人種の使用は，肉体的な観点からも道徳的な観点からも，白色人種に泥を塗る行為」（ディストラー，19頁）ということになる。アメリカ人のビヴァリッジは次のように告発する[56]。

> イギリス人やアメリカ人，フランス人は気が狂ってしまったのだろうか。イギリス人とアメリカ人は唯一黒人問題を理解してきたはずなのに，白人市民をその故郷から追い出し，そこに黒人のための公的な売春宿を設立し，黒人が白人女性をお金で買うことを許すことによって，自分たちが将来に向けてどのような種を播いたのかわかっているのか。
>
> 白色人種の世界支配を覆すには，この事実だけで十分である。（強調―原文）

54）Distler, *op.cit.*, S.39f.

55）この問題については，以下を参照。川越修『性に病む社会―ドイツ　ある近代の軌跡』（山川出版社，1995年）。

56）Beveridge, *op.cit.*, S.14.

この告発や，また「未開人にとって，ドイツ人の威信だけではなく，すべての白人の威信が破壊された」（ディストラー，15頁）という表現からも明らかなように，すべてのパンフレットは，ドイツ人が被った「汚辱」を白人全体の問題へと拡大し，白人世界全体からの同情をひくことによって，フランス軍による占領に圧力をかけようとしている。「黒い汚辱」キャンペーンは実際に，他の諸国でも大きな反響を呼び起こしたが，この問題については，次章で検討したい。

さて，以上のような形で喚起された黒人（そして白人）のイメージには，キャンプトも指摘するように，19世紀以降，ヨーロッパ全体で蓄積されてきた人種人類学，優生学（人種衛生学）などの知見が大きな影響を与えている[57]。たとえば，ディストラーは，ミュンヘンのある医師の言葉だとして次のような文章を引用している[58]。

> 将来，ラインの岸辺に，白人で，美しい顔，りっぱな体格，精神的に秀で，俊敏で健康なドイツ人の澄んだ歌が響く代わりに，灰色のぶちで，額が狭く，鼻が拡がり，鈍重，半動物，梅毒のムラート［黒人との混血児］のしわがれ声が聞こえるという事態に，われわれは黙って耐えるべきなのだろうか。

ここには，人種人類学が練り上げてきた「白人　対　黒人」の二項対立図式が明瞭に反映されていると同時に，優生学が格闘してきた「人種混淆」の問題（これへの憂慮）も示されている。それでは，このキャンペーンは，ナチズムへとつながる「ドイツにおける人種主義」という問題の中にどのように位置づけることができるのだろうか。

Ⅲ

本章では，「黒い汚辱」キャンペーンを「ドイツにおける人種主義」という問題の中に位置づけるために，二つの点――①このキャンペーンの国際的拡がり，②ドイツにおける人種衛生学的知見の浸透――について考えてみたい。

①　まず指摘しなければならないのは，このキャンペーンだけではドイツにおける人種主義の強さについて語ることはできないということである。たしかに，このキャンペーンは，フランスによってドイツに加えられた「汚辱」を激しく告発し，そのために「黒人」を「動物的存在」，「非・人間」へと貶めるものであった。しかし，この「汚辱」はたんにドイツ

57）Campt, Converging Specters, p.101.

58）Distler, *op.cit.*, S.57.

人だけのものではなく，白人世界全体にかかわる重要な問題として提示され，白人全体に訴えかけられており，実際，多くの国で大きな反響を呼んだのである。

そもそもキャンペーンの口火を切ったモレルはイギリス人，ドイツ中で精力的に「黒い汚辱」に反対する講演会をこなしたビヴァリッジはアメリカ人であった。また，本稿では取り上げることができなかったが，イタリアの元首相フランチェスコ・S・ニッティも『ラインとルールにおける人喰い人種』と題する本を出版している[59]。政治的立場を異にするこの三人（モレルは左翼，ビヴァリッジは右翼，ニッティは中道リベラル）が「黒い汚辱」に反対の声を挙げたのは，モレルによれば，武装したアフリカ人は白人の文明にとっての脅威だからであり，ニッティにとっては，ヨーロッパにおける黒人兵の駐屯そのものが「侮辱的行為」だからであった[60]。

ドイツ人によるパンフレットでも，第Ⅱ章で触れたように，植民地兵のドイツ占領は，ドイツ人にとってばかりか，白色人種全体にとっての屈辱であることが強調されている。たとえばライン女性同盟は，パンフレット第二版への序文で，「白人文化の危機」を訴えて以下のように述べている[61]。

> フランス軍国主義のやり方の，これ以上非難すべき証拠はありえないのではないか。アフリカ象牙海岸の黒人――誰もその言葉をわからず，ほとんど一言もフランス語を学んでいない――，そのような最暗黒のアフリカの未開人がラインの岸辺に連れてこられて，そこ，ヨーロッパの心臓部，千年におよぶヨーロッパ文化を誇る国で，白人の国民を監視するのだ。・・・白人文化国民の生命と健康が，思慮がなく粗暴な黒い野蛮人の手に委ねられている！

ビヴァリッジは，「黒人の道徳はわれわれの道徳とは違うので，彼らの原始的な本能は，暴力や罰則への恐れによってしか抑えることはできない」と主張する[62]。ここで，彼女が「われわれ」と表現しているのは，言うまでもなく白人である。したがって，彼女によれば，ヨーロッパにおける黒人の占領という問題はフランスの問題ではなく，ドイツの問題でもなく，国際的な問題であり，すべての国がその影響を受けるのである[63]。

59）ニッティの主張については，以下を参照。Wigger, *op.cit.*, S.46-56.
60）*Ibid.*, S.42, S.53.
61）*Farbige Franzosen am Rhein*, S. 12.
62）Beveridge, *op.cit.*, S.20.
63）*Ibid.*, S.21.

第Ⅱ章で指摘したように，すべてのパンフレットは白人の優越性，白人による世界支配を自明のこととしているが，それが覆されたことに対する怒りも強烈である。たとえば，ラングは，黒人将校が白人被告人の裁判に陪席してこの被告人を嘲り，侮蔑したことを取り上げ，「このような汚辱が，白人に対して白人の故郷で，黒人によって加えられたのだ！」と憤っている。彼によれば，「白人男性，白色人種の権力地位が危険にされされている」[64]。

植民地兵のための売春宿設置や植民地兵によるレイプ事件は，白人と黒人の地位の逆転を示すものと捉えられ，ドイツ人女性に対するレイプも，しばしば，白人女性に加えられた汚辱として表象された。

白人全体の問題であるという認識――「白色人種の存続か滅亡か，がかかっている」（ラング，16頁）――，白人の危機感を煽って白人の連帯感に訴えかけようとする意図は，パンフレットが多数の言語に翻訳されたことにも示されている。多くのパンフレットは，英語，スペイン語，ポルトガル語，フランス語，オランダ語，イタリア語などでも出版され，諸外国に，遠くはアルゼンチンやチリにまで送られた[65]。

その結果，「黒い汚辱」キャンペーンは，ドイツ以外の国でも大きな反響を呼んだ。モレルによれば，国際女性連盟スウェーデン支部の女性たちが彼の記事を支持して，フランスに抗議する署名活動を行い，5万人の署名を集めたという。同様の動きは，ノルウェー，イタリア，フランス自身でも見られた[66]。ビヴァリッジも，フィンランドの女性団体の招待で，フィンランドへの講演旅行を行っている[67]。

イギリスでは，『デイリー・ヘラルド』紙以外にも多数の新聞・雑誌が，モレルのキャンペーンを支持し，多くの女性団体も，ラインラントにおける植民地兵の投入を暴力的行為であると非難した。労働党女性国民会議は，すでに1920年4月に，黒人占領軍の使用は，「占領下におかれた白色人種にとっても，黒人部隊自体にとっても品位を貶める危険な行為」であるとして，反対決議を出している[68]。

「黒い汚辱」キャンペーンは，アメリカでも大きな反響を呼び起こし，活発な議論を招いた。ウィルソン大統領は，すでに1920年春に，多くの市民の抗議の手紙を受け取って，ラインラントのアメリカ占領軍司令官などに事実関係の調査を命じている[69]。民主党の上院議員ギルバート・ヒッチコックによれば，「白人たちの居住地に文明化の遅れた黒人部

64）Lang, *op.cit.*, S.15.
65）Nelson, op.cit., pp.618f.
66）Morel, *op.cit.*, S.7.
67）Beveridge, *op.cit.*, S.4-12; Wigger, *op.cit.*, S.59.
68）Koller, *op.cit.*, S.288ff.
69）Nelson, op.cit., p.617; Koller, *op.cit.*, S.295f.

隊を駐屯させること――彼らは征服者として現れ，犯罪者として行動する――に抗議する」のは，アメリカ合衆国の権利であるばかりか，義務ですらあった[70]。アメリカでの抗議は，1920年から21年にかけての冬に頂点を迎えた。「ライン河畔の恐怖に反対するアメリカ運動」という組織が結成され，この団体は何万というパンフレットをばらまき，2月には，マディソン・スクウェア・ガーデンで大規模な抗議集会を開催した。この集会には1万2000人が参加したという[71]。

以上のように，ラインラントにおける植民地兵の駐屯という問題は，多くの国で「白人にとっての屈辱」，「白色人種の権力的地位の危機」として大きな反響を呼んだ。議会で討議の対象となり，新聞・雑誌などのメディアが取り上げ，既存の女性団体やキャンペーンのために結成された組織が抗議集会を開催し，反対の署名活動を行った。その中で用いられたのは，黒人の「劣等性」や「野蛮性」に白人の「道徳性」や「文明性」を対置するという，すでに19世紀から西欧全体に拡がっていた人種人類学の言説であった。逆に見れば，そのような発想がすでにかなり拡がっていたがゆえに，このキャンペーンが大きな盛り上がりを見せたということもできるだろう。

いずれにせよ，キャンペーンの強力な国際的反響を考えれば，このキャンペーンだけを根拠に，ドイツにおける人種主義の強さを主張することは無理なように思われる。だが他方で，このキャンペーンを通して，とりわけ震源地のドイツにおいては，人種人類学や人種衛生学の知見が知識人のレベルを超えていっそう拡がっていったのである。

② キャンペーンの中では，上述したように，「白人全体の危機」が強調されると同時に，また「ドイツ人にとっての屈辱」，「ドイツ民族の悲劇」，「ドイツ民族の危機」も前面に押し出された。たとえば，ラングは「民族の健康」(7頁)が危機に瀕していることを強調し，この危険を「ドイツ民族のムラート化［混血化］と梅毒化」(11頁）という言葉で表現している[72]。

外相ケスターも，すでに1920年5月の議会における答弁において，「民族の健康」への憂慮を表明していた[73]。

---

70) Koller, *op.cit.*, S.300.

71) Nelson, op.cit., p.620; Koller, *op.cit.*, S.297f. ただし，この抗議集会から3週間も経たないうちに，同じマディソン・スクウェア・ガーデンで，キャンペーンへの反対集会が開催され，2万5000人を集めたという。以下を参照。Nelson, op.cit., p.621; Koller, *op.cit.*, S.298f.

72) 「ムラート化」という表現は，当時ラインラント問題を取り上げる多くの新聞記事で盛んに用いられたようである。以下を参照。Campt, *op.cit.*, p.60.

73) 以下より引用。Koller, *op.cit.*, S.244.

5万人もの異人種の長期的な使用は，民族衛生的な観点から，・・・ヨーロッパにとって大きな危険であります。暴力行為の頻発，悪意のない市民の殺害，女性や少女，少年へのレイプ，売春の増大，小都市における多数の売春宿の設立，および最悪の種類の性病の急速な蔓延――ドイツに対するこのようなフランスの政策は，平時における・・・戦争の続行としか呼びえないものであります。この戦争は，・・・結果として，ドイツの民族体をその西端において絶滅に向かわせるものであります。（圏点―筆者）

ケスターが用いている「民族体」という言葉は，民族全体を一個の身体に擬し，その健康に配慮しようとする人種衛生学的発想に基づく言葉であり，人種衛生学の発展とともに頻繁に使用されるようになっていく。多くのパンフレットでも，この言葉そのものは使用されていなくても，「梅毒化」などによる「民族体」の衰退が危機感をもって強調されている。このような危機感が，「黒い汚辱」キャンペーンを通して一般の人びとにもよりリアルなものとして受けとめられるようになったのではないだろうか。同じことは，「ムラート化」（「人種混淆による退化」）についても言える。

「人種混淆による退化」は，すでに19世紀半ばにゴビノーによって主張されていたが，第一次世界大戦前のドイツでは，プレッツやシャルマイヤーのように，むしろ人種混淆を積極的に評価する声も存在した[74]。だが，キャンペーンの中で声高に唱えられたのは，混血の危険性であった。

ラングによれば，「混血児がほとんど常に，両親の悪い特徴や悪癖を受け継いで生まれることは，周知の事実」（8頁）であった。ディストラーによれば，「混血児（雑種）が増え続けているのは事実」（62頁）であった。ビヴァリッジは，人種の純粋性に対する脅威を聴衆に実感させるために，黒人との混血児と白人の子どもを抗議集会の演壇にあげて見せることまで行っている[75]。『国境通信』（1922年4月26日）のある記事は，「ムラート化」の危険を次のように嘆いている[76]。

占領地域における白人女性の戦慄すべき苦境とならんで，ドイツ民族には，有色人種との暴力的な混淆による甚大な危険が迫っている。・・・

74）拙稿，前掲論文，74頁。

75）Campt, *op.cit.*, p.59. 集会の様子を紹介した新聞記事から推察するに，ビヴァリッジがこの集会に伴った二人の子どもは，彼女のパンフレットの表紙に写されている子どもたちであろう（第Ⅰ章で説明）。この新聞記事によれば，混血の子どもと白人の子どものコントラストを人びとに直接示すことほど，劇的な形で人びとの心を強く捉えるやり方はないという。

76）以下より引用。*Ibid.*, p.60.

いわゆるメンデルの法則に基づいて，人間の血統が異質な血との一度の混淆から浄化されるには300年かかると見積もれば，有色人種による占領が引き起こしたこれほど多くの混淆からは，ドイツ民族が何千年も浄化されえないことは明らかである。･･･人口密集地域のラインラントが，純粋に白色のヨーロッパの心臓部において「ムラート化」にさらされるとは，白色人種にとって何たる災いであろうか。

このように，「梅毒化」の危険にせよ，「ムラート化」の危険にせよ，「黒い汚辱」キャンペーンを通して人種衛生学的知見や発想――「民族の健康」や「血の純粋性」がいかに重要か――が，さまざまなメディアを通していわば「大衆化」されていったのである。

おわりに

「黒い汚辱」キャンペーンにおいて示されたのは，ドイツにおける人種主義の強さというよりはむしろ，白人世界全体が，黒人あるいは有色人種を劣等視し，「白人の優越性」，「白人による世界支配」を当然視しているという事実であった。そこでは，19世紀以降の人種人類学や人種衛生学などの「科学的」知見が，さまざまな形で通俗化されて，読者や聴衆に提供された。キャムプトのいう「人種主義化」[77] はドイツばかりでなく，白人世界全体に当てはまるだろう。

一方で，「人種主義化」の度合いは，当事国であるドイツで一番強かったことも言うまでもない。キャンペーンが激しく展開されている最中の1922年，人種学者のハンス・ギュンターが『ドイツ民族の人種学』を出版した。この後何度も版を重ねることになるこの本の中で，彼は，「黒い汚辱」に言及し，これを性病によるドイツ人の血の汚染，およびアフリカやアジアの人種との混淆による血の汚染とみなし，このような「人種混淆」に対する措置として，国家が妊娠中絶を，襲われた女性に義務づけるよう推奨している[78]。

「ラインラントの雑種」と呼ばれた，占領軍の植民地兵とドイツ人女性とのあいだに生まれた子どもたちは，後にナチスによって断種された[79]。周知のように，ナチスは「民族体」の「病んだ部分」の切除を断行することになるが，「黒い汚辱」キャンペーンは，そ

77）キャムプトによれば，このキャンペーンは，戦後ドイツの国民的な不安を黒人部隊に転移することによって，戦前の列強としての地位を回復させようとする試みであり，その結果が戦後ドイツの状況の人種主義化であった。以下を参照。Campt, *op.cit.*, p.56.

78）Koller, *op.cit.*, S.246.

79）彼らの断種については，以下を参照，Pommerin, *op.cit.*, S.79-84; Campt, *op.cit.*,pp.63-80.

れに向けた肥沃な土壌の準備に一定の役割を果たしたと言えるだろう。新聞，雑誌，パンフレットに小説，さらに映画や戯曲を通して，人種人類学や人種衛生学の知見や発想が浸透していき，まさに「大衆化」されたのである。